The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	初期ヘーゲルと「秘儀結社」：「盟約」から「同盟」へ
Author(s)	田村, 一郎
Citation	メタフュシカ. 2004, 35(2), p. 13-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11637
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

初期ヘーゲルと「秘儀結社」
—「盟約」から「同盟」へ—

田村一郎

はじめに

ドイツ観念論と「秘儀結社」のかかわりを扱った拙著『十八世紀ドイツ思想と「秘儀結社」上 』（多賀出版、１９９４年）が出てから、ちょうど１０年になる。１７世紀後半から１８世紀前半のドイツを、「ゲーテ時代」と呼ぶ人もある[1]。さまざまな領域での思想、ことに哲学と文学などが緊密な連携を保っていたからである。この時代はまた、「秘儀結社の時代」とも呼ばれている[2]。当時のドイツ社会を席巻していたフリーメースンリーなどの「秘儀結社」は、これらの諸思想にどのような影響を与えていたのだろう。このような関心から前回は、カントとフィヒテを中心に検討を加えてみた。

もちろんそれ以後も、ゲーテのヴィルヘルム・マイスター二部作にみられる「塔の結社」や、ペスタロッツイへの影響なども取り上げてきた。しかしやはり気にかかるのは、ドイツ観念論につながるシェリングとヘーゲルである。若い彼らは、国境を接する隣国での動きをどう受け止めたのだろう。またジャック・ドントの言うように、それらを契機とする彼らの思想形成に、当時の「秘儀結社」は大きなつながりを持っていたのだろうか。こうした「秘儀結社」への関心と、ヘーゲルが仲間と結んだというチュービンゲン時代の「盟約」、あるいはフランクフルト時代の「同盟」はどうかかわってくるのだろう。これらの問いを手がかりに、初期ヘーゲルの思想的推移を追ってみた。

一　「初期ヘーゲル」とは

ヘーゲルの「初期」とは、１８０７年に『精神現象学』が刊行されるまでの時期を指すのがふつうである。さらに詳しく言うと、１７８８年１０月に「シュティフト」に入ってから９３

---

1 Vgl. H.A. Korff: *Geist der Goethezeit*, Leipzig, 1914 - 54.
2 Vgl. *Goethewerke*. Jubiläums-Ausgabe in 40 Bde., Stuttgart, 1940, Bd.8, S.XXVI.

年９月にそこを巣立つまでの「チュービンゲン時代」、その年の１０月に家庭教師として赴き９６年末までを過ごした「ベルン時代」、ヘルダーリンの誘いで９７年１月から１８０１年１月までを送った「フランクフルト時代」、そしてシェリングとともに本格的「哲学」研究の道に進む、１８０１年初めから１８０６年１０月までの「イエナ時代」へと至る。今回は、主として「チュービンゲン時代」から「フランクフルト時代」までを扱った。

二　フランクフルト時代までの「神学論」的・「政治論」的研究

「フランクフルト時代」までのヘーゲルの思想的関心は、もっぱら当時のキリスト教会のあり方やイエス解釈と取り組んだ「神学論」と、フランス革命に触発されたヴュルテンベルクの政情や「ドイツ」のあり方を論じた「政治論」に向けられる。簡単にでも、それぞれの特徴をみておこう。

１.「神学論」的研究

ノールの編纂した「若き神学論」[3] によると、中心をなすのは次の５編である。

①「民族宗教とキリスト教」（１７９２年９月―９４年）、②「イエスの生涯」（１７９５年５月―９月）、③「キリスト教の既成性」（１７９５年秋―９６年夏、ただし同書１３９－１５１ページは１８００年９月）、④「キリスト教の精神とその運命」（１７９８年夏と秋―９９年または１８００年）、⑤「１８００年の体系断片」（１８００年９月１４日以前）。

この時期の「ドイツ観念論の最古の体系構想」（１７９６年末―９７年の初め頃）をもヘーゲルによるものとする説もあるが、このことについては後に触れたい。

これらを通じてまず注目されるのは、「キリスト教」理解の変化と、それと軌を一にするカント、ことにその倫理学･道徳論の評価の変化である。

ベルン時代のヘーゲルは基本的にはカント主義者で、すべてのものごとを白紙から再検討するという「批判精神」を基軸に、その理性宗教の立場からキリスト教の「既成性」を徹底して批判する。

そうしたヘーゲルの視点が揺らぎ始めるのは、カントの「道徳律」の絶対視とユダヤ教の「律法」のそれとの親近性に気づいてからである。カントにとって「道徳律」は、「定言命法」の名が示すとおり、一切の内容に左右されない絶対の形式である。その点では、イエスが命がけで克服しようとしたユダヤ教の「律法」と変わるところがない。いわばヘーゲルは、カントの道徳論のうちに「既成性」を見るようになるのである。

そうした転換からヘーゲルは世界を動かす原理に注目し、それを「生」と「愛」に求め、「愛による運命との和解」にキリスト教の再生の道を探る。ヘーゲルにとってフランクフルト時代とはそうした時期であり、「カントと離婚してキリスト教と婚姻」することになるのである[4]。

---

[3] Hrg. von H. Nohl: *Hegels Theologische Jugendschriften*, Tübingen, 1907.

[4] ヘルマン・ノール編『ヘーゲル初期神学論集』（以文社、１９７４年）、２７４ページ（中埜肇氏解説）。

しかしこのような推移と並んで重要なのは、ヘーゲルの神学なり教会批判が「啓蒙」つまり「民衆の教育」への関心を支えとし、それなりの合理性と政治性に貫かれていることである。最初の草稿「民族宗教とキリスト教」では宗教は公的で社会的な現象とみなされ、「民族精神」とのかかわりから考察される。いわば「宗教」と「政治」は芸術や歴史とも結び付けられ、人間の諸活動を支える一体のものとして扱われるのである。「イエスの生涯」という草稿を、カント的理性宗教の立場でどこまでイエス解釈が可能かを試す「思考実験」、とする解釈が生まれるのもそのためである[5]。

２.「政治論」的研究

このように、ヘーゲルでは初期から宗教と政治は一体のものとして考えられてきたが、「政治論」の中心をなすのは次の５編である。

①『カル親書注解』(ベルン時代に書かれたが、「序文」を付けて１７９８年に刊行)、②「ヴュルテンベルクの最近の内情」（１７９８年)、③「ドイツ憲法論」（１７９８－１８０２年)、④「１８１５年および１８１６年におけるヴュルテンベルク王国地方民会の討論」（１８１７年)、⑤「イギリス選挙法改正論」（１８３１年)。

このほかに、「カント『道徳形而上学』解説」「スチュアート『政治経済原理研究』への解説」なども書かれたようだが、現存しない。もちろん「初期」に属するのは③までだが、緊密に関連するので全体について概観しておこう。

まず「カル親書」であるが、カルはフランス領からベルン政府に併合されたヴァード地方の弁護士だが、ベルン政府と争ってパリに亡命する。革命の影響はこの地方にも及び、批判が強まるとベルン政府は弾圧にかかった。それに抗してカルが、１７９３年にパリで出したパンフレットがこの親書である。そこでの骨抜きにされた議会のあり方が故国の実情と対応していたため、ヘーゲルはこれに強く惹かれ詳しい注をつけて翻訳する。

この「訳注」がフランクフルトに移ってから刊行されたのは、ナポレオンによってヘルヴェツイア共和国が作られ、ヴァード地方も解放されたことが直接のきっかけだろうが、当時ヴュルテンベルクの民会が危機に瀕していたことが大きく影響している。このことはヘーゲルが、きびすを接して「ヴュルテンベルクの最近の内情」を出そうとしたことからもうかがえる。

ヘーゲルをそこまで惹きつけたのは、ヴュルテンベルクのそれなりの先進性である。シュトゥットガルトを中心とするシュヴァーベン地方の５０の諸都市は、１５１４年の「チュービンゲン契約」以来大公の専制を許さない強力な民会を組織してきた。大公の多額の借金を肩代わりした代償として、課税や開戦、さらには土地･人民の処分などにも民会の同意を必要とするという権限を獲得していたのである。世継ぎのなかったオイゲン公に迫って、２人の弟を継承者とする「相続協定」を結ばせたのもこうした伝統があってのことで、そこには「旧契約」の尊重

[5] 城塚登『ヘーゲル』(講談社(学術文庫)、１９９７年）１１５ページ以下。なお初期ヘーゲルにおけるキリスト教とカントのかかわりについては、細谷貞雄『若きヘーゲル』(未来社、１９７１年）の五・第一章参照。

ばかりでなく、労働や徴兵の強制の廃止までがうたわれている。１６世紀以降ヴュルテンベルクでは、フランス革命を先取りするような政治体制が布かれてきたのである。ヘーゲルが生まれたのはまさにこの「協定」が結ばれた年であり、ヘーゲルが最晩年までその地の憲法のあり方にこだわったのも、こうした政治風土があってのことだったのである[6]。

これに対して「ドイツ憲法論」は、「神聖ローマ帝国」の盟主オーストリアがナポレオンに屈した「カンポ・フェルミオ条約」（１７９７）を契機とするだけに、帝国の再建策を、皇帝の統帥権と徴税権の強化という君主制強化の方向から模索している。

こうしたヴュルテンベルクを中心とする政治への関心が晩年にまで生き続けていることは、残りの２つの論稿から明らかである。プロイセンの「官報」に載り、最後の部分は発禁となった論文でも、ヘーゲルは執拗にイギリスの選挙法の改正案とからめて、ヴュルテンブルクの実情を論じ続けている。

三　初期ヘーゲルと「秘儀結社」

初期ヘーゲルと「秘儀結社」の関連を考える際に、忘れてならないのはヘルダーリンやシェリングとの交わりと、その核となった彼らの精神的結束である。これまでの研究や訳書などでは、ともに原語はBundであるが、チュービンゲン時代のそれを「盟約」、フランクフルト時代のそれを「同盟」としているものが多い。妥当な用語と思われるので、これにしたがって使い分けることにしたい。

１．チュービンゲンでの「盟約」の成立とめざされていたもの

１）シンクレーアの手紙

チュービンゲン時代の「盟約」を見る上で手がかりになるのは、１８１２年２月５日付けのシンクレーアのヘーゲル宛の手紙である。シンクレーアとは１７９２年１０月からチュービンゲン大学の法学部に在籍した人で、短期間だがヘーゲル、ヘルダーリン、シェリングと親交を結んでいる。フランクフルト近郊のホンブルクの出で、生涯この小国の高官を務めたが、１８０６年にチュービンゲンに戻るまでの病んだヘルダーリンの面倒をみるなど、フランクフルト時代のヘーゲルらの交友のつなぎ役となっている。

シンクレーアは１８１２年２月５日、ヘーゲルに『精神現象学』を読み返した感動を次のように伝えている。

> 「その文体や表現の中にはっきりと、君と、燃える剣を意のままにする君の情熱を認めたし、われわれの精神の同盟時代(die Zeit des Bunds unserer Geister)を思い起こしました。運命がわれわれから、他の仲間の人々を切り離してしまいはしましたが。」[7]

---

[6] 城塚前掲書、８０ページ以下、および金子武蔵訳『ヘーゲル政治論文集　上』（岩波書店(文庫)、１９７９年）、２５０ページ以下（金子氏解説）参照。

[7] Hrg. von J. Hoffmeister: *Briefe von und an Hegel*, Bd.I, Hamburg, 1952, S. 394f.

ここでの切り離された「仲間」とは、発病したヘルダーリンと、戦死した軍人哲学者のツヴィリングを指すと思われる。となるとここでの「われわれの精神の同盟」とは、フランクフルト時代の「同盟」を指すように思えるが、そう解釈するだけでよいのだろうか。

２）「盟約」の仲間とそれがめざしていたもの

①　チュービンゲンでの「盟約」仲間

ヘーゲルとヘルダーリンが「シュティフト」に入学したのは１７８８年１０月であり、この二人はもっとも親しい友人として９３年９月までの５年間を過ごす。１５才のシェリングがそこに加わったのは１７９０年１０月のことで、９５年９月まで在学しているが、ヘーゲルらとともに過ごしたのは９３年までの３年間である。その後の交わりとその内実からしても、この３人が「盟約」仲間だったことはまちがいあるまい。ほかにメンバーとしてはっきりしているのは、手紙を引用したシンクレーアである。この人はシェリングと同じ１７７５年生まれだが、９２年１０月から法学部に入学している。９４年９月にはイエナ大学に移っているから、４人がチュービンゲンでともに過ごしたのは１年間であり、シェリングとシンクレーアだけが２年間一緒にいたことになる。

②　「盟約」がめざしていたもの

> 「彼（ヘルダーリンー田村）が君に手紙を書かないからといって、友情が冷めたなどと考えないで下さい。というのも彼の友情はけっして衰えてはいないし、彼の世界市民という理念への関心はいっそう強まっているように思えるからです。神の国よ、来たれ！われわれは、何もせずに手をこまねいていてはなりません。‥‥‥ 理性と自由はいまだにわれわれの合言葉だし、われわれの一致点は見えざる教会だからです。」[8]

１７９５年１月末に、ヘーゲルがベルンからチュービンゲンのシェリングに送った手紙である。ここには「盟約」の内実をうかがえる、いくつかのヒントが込められている。

前後するがまず「神の国」であるが、この言葉は新約聖書の「マルコ伝」第１０章９節や「ルカ伝」第１１章９節、１１節などに見られる。「天の御国」とも言いかえられ、繰り返しその顕現が近づいていると説かれているとおり、死後の世界のことではなく、この地上に生まれようとしている神の支配を指している。ということはヘーゲルらがめざしていたのも、この地上での理想の実現だったと見てよかろう。

次に「世界市民」であるが、これはまさに宗教上の「寛容」をふまえ、民族･信仰･階級･家柄など一切の差別を排するフリーメースンリー（以下メースンリーとも省略）のモットーにつながるものである。カントが歴史を「世界公民的見地」から捉えることの大事さを強調したように、「小国分立」のドイツ圏では最も広く支持された理念の一つだった。

---

[8] *Ebd.*, S. 18.

他方「理性と自由」は、１７９３年１１月にノートルダム寺院で「理性の祭典」が開かれたことに象徴されるとおり、「自由･平等･友愛」と並ぶフランス革命の中心的なスローガンである。

最後に「見えざる教会」であるが、レッシングはメースンリーの「理想化」をめざした『エルンストとファルク ― フリーメースンのための対話』（１７７８－８０）の中で、メースンリーをこう呼んでいる。ヘーゲルが学友から、「レッシングの達人」と名づけられていたことも思い起こされてよかろう。

③「盟約」の基本性格

これらのキーワードから、若きヘーゲルらが情熱を傾けた「盟約」の基本性格が浮き上がってくる。諸家の解釈をまとめると次のようになろう。

a.「政治クラブ」

「盟約」を、「政治クラブ」的なものととらえる人は多い。ローゼンクランツは、「シュティフトでも、政治クラブが結成された。フランスの新聞が購読され、そのニュースが競って読まれた」と記している[9]。ディルタイによると、そこにヘーゲル、ヘルダーリン、シェリングも加わっていたという[10]。学生がこぞって読んだのは新聞ばかりでなく、『ミネルヴァ』のような雑誌も含まれていた。９４年の末にヘーゲルは、ベルンからシェリングに次のように書き送っている。

「数日前たまたまここで、アルヒェンホルツの『ミネルヴァ』で君も知っている『書簡』の著者と話をしました。表向きは、イギリス人のOというサインでしたよね。ところがこの人はシュレージエンの人で、エルスナーという名でした。」[11]

「書簡」とは、「フランスにおける最近の出来事についてのパリ書簡」とか「歴史的書簡」として、アルヒェンホルツがドイツ語で出していた『ミネルヴァ』に掲載されたものである。１７９２年８月の１４号から翌年３月の２１号まで１０回にわたって連載され、革命後のフランスの生々しい状況を伝えたルポルタージュとして評判になったらしい。

『ミネルヴァ』は穏健なジロンド派の立場に立つといわれているが、ロベスピエールやバブーフの翻訳なども載せている。このような雑誌をヘーゲルらが愛読していたということは、その「政治クラブ」の性格をうかがわせる。ルカーチはきっぱりと、こう言い切っている。

「彼ら（ヘーゲル、ヘルダーリン、シェリング―田村）はまた、伝統に従って、チュービンゲン・シュティフトのある秘密クラブの中心になっていたが、それはフランス革命についての禁書を読む会だった。」[12]

---

9 K. Rosenkranz: *Georg Wilhelm Friedrich Hegel's Leben*, Berlin, 1844, S.28f.
10 W. Dilthey: *Gesammelte Schriften*, Stuttgart, 1959, Bd.IV, S.13.
11 *Briefe von und an Hegel*, Bd.I, S. 11f.
12 *Georg Lucács Werke*(Luchterhand), Neuwied und Berlin, 1967, Bd.8, S. 44.

b.「秘儀結社」

「秘儀結社」、ことに「メースンリー」とのかかわりを強調するのはドントである。ドントは『秘められたヘーゲル』（１９６８）から『ヘーゲル伝』（１９９８）まで、一貫して「盟約」とメースンリーを結び付けようと努める。

とりわけ強調されるのが、ヘーゲルが１７９６年にヘルダーリンに贈ったと言われる詩「エレウシス」である。この詩をドントは、「フリーメースンリー的関心という背景から見なければ、完全には理解できない詩」とみなす[13]。これを裏付けるためドントは、シラーの「歓喜に寄す」を援用する。そこに繰り返し出てくるBruderを、「兄弟」でなくメースンリー的な「同志」と理解しようとするのである。したがって「この世で一人でもわがものと呼べるような人」を持てなかった者は、「泣きながらこっそり、このBundを立ち去るがいい」のBundも、「メースンリー」と解釈されることになる[14]。

詳細は省かざるを得ないが、結論から言うとドントのメースンリー解釈は、かなりドイツでの実情と食い違うところが多いように思う。

当時のドイツでは「メースンリー」は、「合理的」傾向のものと「神秘的」傾向のものとがせめぎあっていた。前者を代表するのが、『ベルリン月報』を主宰したビースターである。生涯「秘儀結社」に近づかなかったカントが、この雑誌に１５編もの時評論文を寄せたのは、ビースターの啓蒙と自律を尊重する「世界公民」的な姿勢に共感したからだろう。このことはカントがこれらの論文のいくつかで、「神秘的メースン」を代表するヤコービやシュロッサーの感情的宗教哲学を、手厳しく批判していることにはっきり現れている[15]。しかし一般的にはドイツでは、「神秘的」傾向が強かった。したがってメースンリーの「人間性の尊重・信仰と良心の自由の保証・あらゆる差別の排除・コスモポリタニズム」という基本精神に惹かれながらも、その現状に飽き足りなかったレッシング、フィヒテ、ヘルダー、ゲーテなどは、その「理想化」を図り、その「革新」をめざした「イルミナート結社」に近づいたりもする。

ことに注目したいのは、専制的なカール・オイゲンの支配するヴュルテンベルクでは、「イルミナート結社」の政治的動きへの危惧もあって、８０年代から「秘儀結社」の活動は全面的に禁止されており、その方針は王が変わっても持続されている。したがって学生のクラブへの「秘儀結社」の影響は、フランス革命などを通しての間接のものだったとみてよかろう[16]。

c.「理想主義的な友愛結社」

速水敬一氏などは、「盟約」をフランス革命の精神への共鳴に発し、その精神を活かしてドイツでの変革、ことに「哲学革命」をめざした「友愛的な結社」とみなしている[17]。これまで述べてきたことからも明らかなとおり、きわめて妥当な解釈といえよう。

---

[13] J. D'Hondt: *Hegel secret. Recherches sur les sources cachées de la pensée de Hegel*, Paris, 1968, p.242.
[14] *Ibid.*, p.238sq.
[15] 拙著『十八世紀ドイツ思想と「秘儀結社」上 』（多賀出版、１９９４年）、１５４ページ以下および１６３ページ以下参照。
[16] Vgl. A. Rossberg: *Freimaurerei und Politik im Zeitalter der Französischen Revolution*, Struckum, 1983, Kap.I.
[17] 速水敬一『ヘーゲルの修業遍歴時代』（筑摩書房、１９７４年）、９２ページ。

なおこうした見方をとれば、いわゆる「ドイツ観念論最古の体系構想」も理解しやすくなる。そこにさまざまな思想が混在しているように見えるのは、それが「盟約」の再結集を図ったもので、少なくとも３人の手が入っているからではなかろうか。ヘーゲルのベルン末期に書かれたとも推測されるこの草稿は、おそらくヘルダーリンの構想をもとにシェリングがイエナで執筆してヘーゲルに送り、補正してヘーゲルが送り返したものなのだろう。

２．フランクフルトでの「同盟」の成立とめざされていたもの

１）「同盟」の成立

もちろん先駆をなすのは、ハネローレ・ヘーゲルの『ヘルダーリンとヘーゲルをつなぐイザーク・シンクレーアー　ドイツ哲学の成立史』（１９７１）[18] だろうが、フランクフルト時代の「同盟」の意義を明確にしたのは、ヤメとペゲラーが編纂した『ドイツ精神史におけるホンブルク・フォン・デア・ヘーエー　ヘーゲルとヘルダーリンをめぐる友人仲間の研究』（１９８１）である[19]。

それによると家庭教師の職を用意し、１７９６年にヘルダーリン、翌９７年初めにヘーゲルをフランクフルトに招いたのはかつての盟友シンクレーアだったという。９５年秋から近郊のホンブルク方伯の参事官を務めていたシンクレーアは、積極的にチュービンゲンでの「盟約」仲間の再結集を図り、これにシンクレーアのイエナ大学の学友で、ホンブルクの公子の将校だったツヴィリングが加わる。この人はその深い思索から、「同盟における第３の知性」とも呼ばれている[20]。シンクレーアが「大反逆裁判」にかけられ不在だった１年間、病気のヘルダーリンの面倒を見たりもしているが、１８０９年に戦死している。こうしたメンバーに、フランツ・ヨーゼフ・モリトーやベッティーネ・フォン・アルニムらがかかわることで結ばれたのが「同盟」というのが、「ホンブルク研究会」の人々の一致した見方である。

２）「同盟」がめざしていたもの

ことにヘンリッヒらが強調するのは、「同盟」を主導したのは「合一哲学」をめざしたヘルダーリンだったという点である。「ヘン・カイ・パン」という神秘的汎神論を軸に、ヘルダーリンは「美的プラトン主義」による萌芽的な弁証法思想を構想していたと見るのである。しかし詩的で文学的なその思索は、ヘーゲルばかりでなくシェリングにも影響を与えながらも、より強固な論理を求める両者によって越えられていく。それがヘーゲルをイエナへと駆り立て、シェリングとの「哲学的」協業をうながし、「絶対的観念論」の体系化へと導くことになるのである。

---

18 H. Hegel: *Isaak Sinclair zwischen Fichte, Hölderlin und Hegel*, Frankfurt am Main, 1971.

19 Hrg. von C. Jamme und O. Pöggeler: *Homburg von der Höhe in der deutschen Geistesgeschichte. Studien zum Freundeskreis um Hegel und Hölderlin*, Stuttgart, 1981.

20 *Ebd.*, S.247.

四　「盟約」「同盟」と「秘儀結社」

ヘーゲルが生涯にわたってめざしたのは、人間の可能性の全的･総合的な実現だった。カントへの共鳴から出発したヘーゲルが、「啓蒙」の柱である理性至上主義に飽きたらず、心情や感性をも含む幅広い人間理解を求めたのも、あくまでギリシャ的共同体と民族と歴史の場でのその展開にこだわったのも、全的・総合的な視点にこそ人間の可能性実現の場があると信じたからだろう。その点ではヘーゲル哲学はあくまで「歴史哲学」であり、世界史という舞台において人間が民族精神･世界精神を介してみずからを実現してゆくドラマだったのである。

こうした構想をまさに「心根(Gesinnung)」から育くみ支えたもの、それがチュービンゲンの「盟約」であり、フランクフルトの「同盟」だったのではなかろうか。

（たむらいちろう　鳴門教育大学名誉教授）

［キーワード］
初期ヘーゲル　　秘儀結社　　チュービンゲンの「盟約」　　フランクフルトの「同盟」